

様式 4

令和元年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立坂本中学校 教諭 佐藤千紘

- 1 派遣期日 令和元年11月15日（金）
- 2 研修先 学校名（会場名）前橋市立荒砥中学校
所在地 群馬県前橋市立荒子町1338
<http://www.menet.ed.jp/arato-jhs>

3 研修内容

（1）視察校における研究への取組

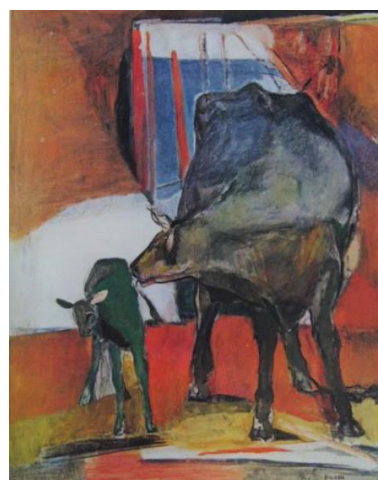
研究のテーマ：「出会い かかわり つながる造形」～鑑賞教育の多様性について～

前橋市立荒砥中学校では、幼、小、中、高を通して、「出会い」「かかわり」「つながる」の3つの視点で、造形活動を推進している。それにより生徒が達成感や充実感、自己有用感を高めるとともに、視野を広げ、志高く、素晴らしい未来を創り出していく資質や能力の育成に取り組んでいる。

また、新学習指導要領で示された三つの柱である「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を踏まえ、造形教育における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての取組を推進している。

① 「出会い」

「出会い」とは人や材料、題材との出会いを意味している。人については友達や家族、先生、造形活動にかかわる人（芸術家、職人、材料の専門家など）、地域の人、外国の人など、様々な人が想定される。それらと出会うことにより、新しい知識や技術を習得し、自分とは異なる見方・考え方を知り、人の手によって生み出された造形の素晴らしさに気づいていく。



山口薫 「花子誕生」

② 「かかわり」

「かかわり」とは、身近にある様々な材料に直接触れ、その感触を楽しみ、形や色のおもしろさに気付き、加工に必要な用具や加工方法を知り、実際に試し、確かめながら加工してみる。そうした体験を重ねていくことによって、材料や素材の特性を理解し、その特性を活かして想いを巡らせながら、試行錯誤していく。その思考の過程を経て、自分らしい表現をすることができるようになる。

③ 「つながる」

「つながる」とは、表現の過程で、表現活動そのものを楽しみ、その喜びや嬉しさを他者に発信したり受信したりすることを意味している。出会った人たちや身近な人達と、社会や環境とつながっていくことは造形活動の面白さや造形表現の美しさを実感することにもつながっていく。

今回の公開授業では、特に作品との「出会い」を導入の中で工夫し、生徒同士の意見交換などの「かかわり」の中で新たな考え方や自分と異なる意見を取り入れることでの

人との「つながり」が意識されていた。また、地域の美術館に所蔵されている作品を鑑賞することでの地域や社会との「つながり」をもつことのできる授業構成にもなっていた。同じテーマであっても表現活動と鑑賞活動では期待できる効果が異なるところに鑑賞教育における可能性を感じる。

4 授業を参観して

授業公開が行われた前橋市立荒砥中学校では、『鑑賞入門「花子誕生」』という題材名で鑑賞活動が行われた。「花子誕生」は山口薫が 1951 年に油彩で制作した作品で、現在は群馬県立近代美術館に所蔵されている。作品との「出会い」は A3 判の図版から始まる。

目を凝らして見ないと描かれているものがわからない大きさで、まずは目に飛び込んできたときの印象や、

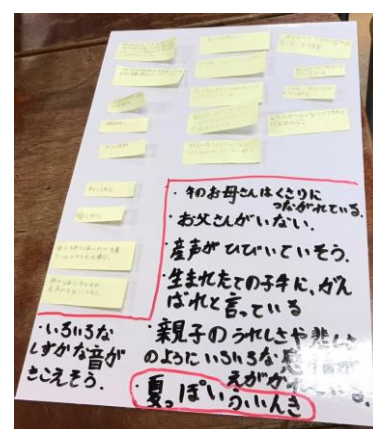
全体的な色合いから受ける感覚や描かれているモチーフについて全体で考える時間をもつ。全体で第一印象について話し合った後は、個人の活動となった。今度はハガキ大の図版を一人一人に配付し、作品に描かれているものについて話し合った。個人の考えがまとまったら、A4 大の図版をイーゼルへ立て、数人で同じ絵を見ながら、作品から感じる事、考えたことについて自分の考えを述べ合った。説明をする生徒は、作品を指さしながら話し、聞く側の生徒はうなずきながら食い入るように図版を見て確認をする姿があり、どのグループも集中して鑑賞し、議論し合っていた。各グループから出た意見を授業者が始めの図版を使いながら、言葉で書き留め、板書にまとめていく。作品のテーマや、色合いから受ける作者や作品内に書かれた動物の感情などまで話し合われ、

深まってきたところで、ついに県立美術館から借用した原寸大の複製図版が登場した。ここからは、作品の前に全員が集まり、先ほどの話し合いを踏まえて、より本物に近い図版を見て感じたことや、最初の印象と違ったことについて話し合った。最初に見た図版よりも明るい色合いだと話す生徒や、初めに作品を鑑賞したときよりも、グループで協議した後の方が作品から温かい印象を受けたと答える生徒がみられ、学習形態

を変化させていった効果が表れていた。



グループでの話し合い



グループ協議の記録



原寸大図版での鑑賞の様子

4 感想

鑑賞資料との出会いの在り方について改めて考える機会となった。1 時間の中で一つの資料についてじっくりと鑑賞する際に、学習形態を個からグループそして全体へと変化をもたせたり、鑑賞する図版の大きさを A3 からハガキ、A4 から原寸大へと変えたりすることで、生徒それぞれが新たな気づきを得て、初めにもったイメージを深めることにつながることを実感した。特にイーゼルで図版を立て、数人で同じ図版を見ながら自分の意見を発表する方法は印象的であった。また、個人ワークとグループワークでは付箋を、全体の話し合いでは短冊を使って鑑賞した内容を言語で明示し、まとめていくことで、鑑賞して感じたことを整理し、生徒間で共有することができていた。それぞれの第一印象を話し合う段階から、作品の構成や色合いによる工夫、作者が伝えたかった美しさ、作品のテーマやメッセージ性などについての話せる段階へと深化していく様子が見て取れ、有効性を確認できた。今回の研修を自分の鑑賞指導の在り方について見直す良い機会として、今後の授業に生かしていきたい。